

<論文>

シマの維持存続をめぐる女性の多様な実践

—— 沖縄・小浜島を事例に ——

Various Practices used by Women to Maintain their Community Bonds
at Kohama Island in Okinawa

加賀谷 真梨*

要旨

本論文では、沖縄県八重山郡竹富町に属する小浜島の本部落の人々が、本土復帰という社会構造の変容を経る中で、離島が抱える過疎化という問題をどのように回避し、シマを存続させるためにいかなる生存戦略をとってきたのか、その戦略に対する男女の係わり方の相違に留意して論じる。とりわけ、「男尊女卑的社会」と、小浜島の女性自らが表象する社会において、女性はシマの生存戦略にどのように係わりを持ち、どのような位置取りをしてきたのか、その実践を生業、自治、家庭、宗教の4つの活動領域に着目して明らかにする。そして、女性の実践の意味を彼女らが属する社会的・文化的脈絡の中で解釈することにより、多様な主体としての女性を描きうることを提示する。

キーワード： 沖縄、生存戦略、年中行事、ジェンダー、女性の実践

目次

I はじめに

II 小浜島の生存戦略

- 1 自ら誘致したリゾートホテルと島人との関係性
- 2 島出身者の結節点としての年中行事
- 3 小浜島の生存戦略

III 小浜島の女性の社会的位置づけ

- 1 女性の活動形態
- 2 社会への女性の多様な参与形態

IV 結論

I はじめに

* 放送大学非常勤講師、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科研究院（研究員）

現在、国際的に、社会における女性の地位は、当該社会における政治参加や雇用機会、給与所得額等の政治力や経済力を指標に測定されている¹[国連開発計画 1996]。また、男性との格差が認められた場合には「エンパワー」すること、すなわち女性に欠けている「パワー」をつけることが求められている。このことから、女性のあるべき姿としてカント的な「自律の能力を持つ自由な主体」が想定されていること、また、「パワー」とは自律の能力を意味し、女性の地位の低さはこの自律の能力が欠けた状態と同義に捉えられていると読み解くことができる。日本もこのような国際的動向を受け、1999年の男女共同参画基本法制定後に施行されている多くの政策においては、女性の政治的・経済的利益の享受に力点が置かれてきた。

むしろ、政治力や経済力が女性の地位の一側面を指し示すことは否めないが、このような手法を万国共通に適用し、それにより女性の地位を論じる傾向には疑問を呈さざるを得ない。その理由の一つに、社会における女性の地位を測定する上で想定されている「社会」が、一律に等しいものとして（西欧近代的社会として）想定されており、地域差や地域毎の固有の文化体系が問われていない点が挙げられる。社会が異なれば女性の自律のために必要な能力が異なる、あるいは、主体のあり方も異なるという視点が欠落している。二つ目には、文化人類学者がこれまでに明らかにしてきた、指標化困難な女性の「パワー（自律の能力）」が考慮に入れられていない点である。例えば、アブルゴットはヴェールを着用したベドウィン族の女性達が歌謡を通じて己の感情を表現し、その暗喩に満ち溢れた歌詞が、いかに男性の生存の根幹にある名誉と恥というイデオロギーを脅かすかを提示した[Abu-Lughod 1986]。ベドウィンの女性がその社会で自律した生活を営むことは、必ずしも政治に参加することでも経済力をつけることでもなく、いかに歌謡で自己の感情を表現するかにかかっているのである。また窪田は、これまで多くのアボリジニ研究者が、女性の宗教的役割が当該社会に及ぼす影響力を明らかにしてきたことを指摘している[窪田 2004]。これらの先行研究が提示してきたのは、女性が主体として己の意志を社会に反映したり、社会の規範を揺るがしたりする程度や質は、必ずしも政治の場における女性の議席数や給与の額等の数値によって示せるものではないということに他ならない。むしろ、女性の意志や意見がどのような形で社会に反映され、女性の行為がどのように当該社会に影響を与えるのかといった、社会との女性の多様な係わり方やそのプロセスに着目することが重要である。それにより、矮小化、固定化された形で「女性のあるべき姿」が標榜されることなく、多様な主体としての女性の生き方を示すことができると考える。

それゆえ、本論文においては社会における女性の地位を、彼女らが属する個々の社会との関係性に焦点を当て、社会における女性の位置づけとして論じることを試みる。具体的には、沖縄県八重山郡竹富町に属する小浜島の本部落を事例に、最初に、この地域社会の

¹ 国連開発計画（UNDP）が 1995 年度版の『人間開発報告書』において初めて提起した「ジェンダーエンパワーメント指数（GEM）」に示される[国連開発計画 1996]。

固有性や特性を、共同体の生存戦略という視点から明らかにする。さらに、その戦略と女性の活動形態とを照らし合わせ、当該社会における女性の行為の意味や機能を考察し、それにより社会における女性の位置づけを論じる。「小浜は男尊女卑的などころがある」と、他のシマの人々のみならず、小浜島の女性自らが表象する社会ではあるが、女性自身がこのように表現することの意味と、女性の当該社会における位置づけとを論理的に接合させたいと考える。

小浜島は沖縄本島の南西およそ 400km に位置し、在来の島民である「島人²」がおよそ 400 人 210 世帯居住している「本部落」と、明治時代に沖縄本島の糸満から移住してきた漁業を生業とする人々がおよそ 60 人 20 世帯居住している「細崎部落」の二つの部落を擁する³。本論文は 2002 年度の小浜島の本部落で行った調査資料に基づき論じる。

II 小浜島の生存戦略

1 自ら誘致したリゾートホテルと島人との関係性

【小浜島における本土企業誘致活動とその背景】

「果報の島」と呼ばれ肥沃な土地を有する小浜島では、戦前から稲作を中心とした農業が営まれ、1950 年代後半以降甘蔗栽培が盛んとなった。しかし、1971 年の 3 月から 9 月末にかけて長期旱魃が発生し、同年 9 月には記録的な大型台風 28 号が旱魃の被害に輪をかけるかのように八重山を襲った。この天災により島は甚大な被害を受け、生活難に陥った多くの島人が出稼ぎのため島を離れ、人口は激減した。この 1971 年という時期は、翌 1972 年に沖縄が日本復帰を迎えるにあたり、本土の企業が土地買占めに奔走していた時期でもあった。当時の島出身の町議員の話によると、天災の被害を目の当たりにしていた当時の町長や議員達が、「人口流出は、シマの活性を低下させ、文化継承にまで影響を及ぼす。シマを救うには内地の企業を誘致することしか他に道がない」と考え、本土の企業に対し積極的な誘致活動を行ったという。そして、本部落では 1973 年に「小浜島結成会」が結成され、本土企業の誘致活動が行われた。当時、小浜島には三つの企業がアプローチをかけていたが、そのうちの 1 社である株式会社ヤマハの川上源一翁（当時の会長）は、始終一貫、地元根ざしたリゾート開発のあり方を説き、自然環境を可能な限り残すことを開発の基本とする手法を説いていた[群星会 1999: 3]。結成会のメンバーは、このようなヤマハの姿勢を見て、最終的にヤマハを誘致することに決定したという。そして、島人は

² 先祖代々小浜島に住み、島に家や墓がある在来の島民は、自らを「島人（シマンチュ）」と称し、「移住者」といった他の島民と区別している。それゆえ、本稿においても彼らの用法に倣い、在来の島民を「島人」という用語で表現する。なお、「島」という語に本来 island の意味はなく、沖縄では地縁・血縁で結びつく共同体を「シマ」という言葉で指し示す。それゆえ、本稿においてもそのような用語として用いる。

³ 本部落と細崎部落はそれぞれ公民館組織を有し、祭祀行事、行政とも別に行われている両部落間の社会的関係は弱く、日常生活での交流も少ない[加賀谷 2005: 38]。

同年におよそ島の4分の1の面積に値する150ヘクタール⁴の土地をヤマハに売却し、その6年後の1979年にリゾートホテル「はいむるぶし」が開業した。現在に至るまで島人はこのホテルと共生関係にある。

小浜島におけるリゾートホテルの誘致活動は、このように表向きは本部落住民の間に反対運動が生じないままに島人主導で行われ⁵、その後現在に至るまで来島者数は増加の一途を辿っている。1975年においては11,916人であった年間来島者数は1985年には40,476人に増加し、以降2000年までの間はおよそ4万人台で推移した。そして、2001年度には68,617人に達し、現在でもその数は増加傾向にある。

【島人とリゾートホテルとの関係性】

こうした社会変動を踏まえつつ、島人とリゾートホテルとの関係に着目すると、ホテルが開業した1979年以降2000年に至るまで、ホテルに勤務する島人は極めて少なく、彼らは間接的にしか観光事業に係わってきていないといった不思議な現象がみられる。ホテルに勤務する島人の数は、2000年時点で10人（正社員男性4名、契約社員6名）に過ぎず、施設における若者の雇用創出とそれに伴う過疎化の対応策の必要性がホテル開業前には地元議員らによって叫ばれていたが、こうした事態は起こらずに現在に至っている。ホテル側は、「採用募集を積極的にかけているにもかかわらず、申し込み者が少なく、採用しても長続きせずに自ら辞めていく若者が多い」と言う。その一方で、誘致活動に携わった当時の議員が、地元住民の雇用者数が少ないことに対し「話が違うではないか」と抗議したものの、上記の事情を説明されて言葉を失ったというエピソードもある。島人からも、ホテルでの雇用者数が少ないことに対する批判はほとんど聞かれない。

ホテルにおける雇用者の少なさが指摘できる一方、島人はホテルから間接的に経済的利潤を得ている。1994年にはクリーニング会社が島人により創設され、ホテルのクリーニング業務を一括受注している。また、食材や必要資材を搬入する運送会社も島人によって2社設立され、物資の運搬の委託を受けており、その他にも観光客を輸送する運輸業者が石垣島出身者によって設立され、そこにも幾人かの島人が雇用されている⁶。また、2002年時点で本部落には5つの民宿があり、このうち4つは既にホテル設立以前から営業を開始していたが、学者や工事関係者を泊めるための宿として機能していたこれらの民宿が観光客を相手に商売をするようになったのもホテル設立前後からである。ただし、これら4つの民宿は、ホテルが満室の際の添乗員への宿泊部屋の提供以外には係わりはなく、ホテルとの提携事業も行っていない。唯一、ホテルの開業後に営業を開始した民宿Uだけは例

⁴ 売却した150ヘクタールの土地のうち80ヘクタールが町有地であった。

⁵ 反対運動は工事に伴う赤土の流出等、漁業への影響を危惧した細崎部落の人々が主に展開した。

⁶ ただし運輸業者で働く地元の従業員数は2～3人と少ない。

外的にホテルと提携してオプションツアーを主催し、さらには、エコツーリズム的な企画ともいえる「小浜島ふるさと農場倶楽部⁷」や「キビ刈り援農塾⁸」を独自に企画し、リピーター率を上げている。後者には2000年夏の2ヶ月間でのべ1,200人が参加しており、これを機に島内で働き始めた人も数名いる。

ところが、島の活性化に繋がる可能性を有した民宿Uの企画に倣う動きが島人の間にほとんどみられない。唯一、1997年に島出身者の男性Dが農業生産法人Kファームを設立し、2000年より民宿Uの「キビ刈り援農塾」と類似した形式で、無給だが宿泊費・食費は無料でキビ刈りに従事する「援農隊⁹」の募集を開始した。「Kファーム」では、毎年15人前後の「援農隊」を募集し、Dの農地のみならず島内の一般農家にも、援農隊として全国から集まった若者を派遣している。しかし、これは民宿Uのような観光産業の活性化という目的とは異なり、あくまでも農業の振興を目的としている。

小浜島ではDに代表されるように、観光産業ではなく、むしろ農業を中心に据えてそれに従事している島人が多いという特徴が見出せる。2000年の国勢調査における253名の産業別業別就業者数のうち第三次産業は61%の156人を占め、観光産業の伸長が指摘できるものの、他方で1995年から2000年にかけて、国勢調査における農業従事者数は68人から77人に増大しており、農業の衰退傾向は認められない。農業の内訳を2000年農業センサスにおける経営識別農家数から明らかにすると、単一経営44戸のうち、工芸作物（サトウキビ）32戸、肉牛12戸、そして複合経営が25戸となっており、サトウキビ生産と肉用牛生産が小浜島の基幹産業となっていることが見てとれる¹⁰。ただし、島の製糖工場は採算ラインを割り¹¹、売り上げ収支は黒字だが運営が赤字という状況が続いている。そのような状況でありながらも、サトウキビの生産が現在においても基幹産業である背景には、島人とサトウキビ生産との一種独特の係わり方がある。この島では、1955年以降サトウキビの生産に重点が置かれてきたが、1973年に製糖工場の旧株主である「大洋漁業株式会社(現在のマルハ株式会社)」が撤退する際、地元の有志が株主となって出資し合い工場を買い取った。そのため、現在においても株主のみならず常勤取締役3名、従業員10

⁷ 宿泊客が3,000円で自分のパインやバナナ等の木を植え、収穫しに来てもらうという趣旨の企画。

⁸ 旅費負担した上で宿と食事を賄ってもらう代わりに、民宿Uの所有するキビ畑のキビ刈りを無償で手伝うという1994年から始まった企画。

⁹ この企画は最初に与那国島で1976年より開始されている。

¹⁰ 近年はサトウキビ生産から肉用牛生産への移行が生じている。ただし、2000年農業センサスにおいては島の農家戸数は72戸と報告されており、そのうち小浜糖業の提供資料によれば、同年小浜糖業にサトウキビを売却した農家数は70戸あり、サトウキビ生産が突如衰えたわけではない。

¹¹ 最盛期は昭和39年～昭和40年にかけての冬季であったと工場勤務者は語る。これは日本政府が1959年に「甘味資源特別措置法」を施行し、同年琉球政府が「糖業振興法」を公布したことで、サトウキビの最低価格基準が定められ、さらには1960年代に生じた国際糖価の暴騰した時期と重なる。

名は皆島出身者であり、サトウキビ生産と製糖業は地元の人々の生活そのものと深く結びついている。

【島人と移住者との関係性】

リゾートホテルの誘致により、経済効果のみならず人口の維持を図ろうとした島人の試みは、結果的にしっかりとその目的を果たせたと言える。離島において、その島の維持存続に最も大きな影響を与えるのは人口であり、特に小・中学校の廃校は、次世代の島の担い手の喪失のみならず、最も生産力を持つ親の世代がその時点で島から消えることを意味するため、一番恐れられてきた。しかし、本土出身者のホテルの従業員が島に移住し、結婚を経て出産を迎えたため、島の人口、および、保育園や小中学校に在籍する児童数は現在に至るまで大きく減少することなく維持されてきている。2000年の時点で、保育園の生徒数のおよそ半数がホテル従業員の子どもたちであり、小中学校においては40名のうち12名を占めている¹²。

移住者と島人との間には日常かつ私的な交流が見られる一方で、一線が画されていることも見てとれる。一例を挙げると、公民館役員のメンバーに移住者は選出されておらず、また、シマの行事に参加するのは移住者の子どもたちだけであり、特に成人男性は、島人以外の参加も認められている結願祭の舞台に立つこともない¹³。年中行事には、公式にシマに貢献している企業として会社宛てに招待状が送付され、企業の代表者が観覧するだけに留まり、移住者に行事に参加するような積極的な働きかけはない。他方、同じく島内に居住する島外出身者であっても、学校教員や郵便局の職員、医師などは異なった扱いを受ける。彼らは幹部役員への選出こそないものの公民館役員に抜擢されることもあれば、結願祭には必ず参加を促される。このような交流形態の差異は、リゾートホテルを完全に受容しているわけではないという島人のメッセージとして捉えることもできよう。いずれにせよ、島人はホテルの開業により恩恵を享受しつつも、島外出身者とは一線を画した生活をこれまで25年以上にもわたって維持し続け、移住者もまたそのような自分達の位置づけを理解し、受け入れてきた。両者の間には、相互に干渉しないといった暗黙の規範が構築されているかのようである。

以上のことから、小浜島の人々は自ら誘致したリゾートホテルと間接的に係わりながら生活しており、沖縄県全土が観光産業に世帯収入増加の打開策を見出そうとしている中、島を訪れた観光客を対象に事業を開始する、あるいは、より多くの観光客をホテルではなく集落側に引き寄せようといった積極的な試みをしていないことが明らかとなった。さら

¹² ホテル従業員のうち独身者は、部落から遠く離れたホテルの敷地内にある独身寮で起居しているが、家族を持つ従業員に限り、部落内に居住することが認められているため、およそ10世帯の本土出身者が現在部落内に居住している。

¹³ 女性に関しては、例えば民宿のヘルパーが参加することもある。

に島人らは、移住者を受容しながらも彼らとの境界を維持し、それはあたかも島人のみによって構成される独自の世界を維持する実践のようにも見てとれる。

2 島出身者の結節点としての年中行事

【年中行事の特色】

小浜島の人々が先に示したような生活を営んでいる背景には、他島の人から「行事の島」と称されるほどまでに、年中行事の遂行が島人の生活の中心に位置づけられていることが関係しているように思われる。

別稿で論じたように、小浜島では現在においても年に 22 の年中行事が遂行されている[加賀谷 2005: 36]。八重山諸島一帯では「祭」としての要素が強い特定の年中行事だけが行われ、それ以外の年中行事は衰退の一途を辿っているのに対し、小浜島では祭のみならず御嶽祭祀¹⁴までもが戦前と比べてもその数をほとんど変えることなく行われている¹⁵[加賀谷 2005: 36]。7 月から 9 月の間には、三大大行事「ポール（豊年祭）」「ソーラ（盆行事）」「シツ（結願祭）」があり、これに要する日数は練習期間を含めると、のべ 50 日前後になるものの、島人はほぼ全員この三大大行事の全てに参加し、石垣島など他地域に居住する島出身者も数多く馳せ参じる[加賀谷 2005: 36]。また、他のシマでは司祭者のみによって執り行われることが多い御嶽祭祀においても、神役以外の島人が数多く参加する。さらには、参拝者は必ずシマの女性が織った着物に身を包み、クバの葉で作った扇を欠かさず手にしており、衣装等の様相も昭和 43 年時点と変わらない[竹富町史編集委員会 1993: 72]。供物についても、他のシマでは調理を施したのから既製品の菓子に変化したところが多いが、小浜では必ずおにぎりとうサイ¹⁶が用意され、年に 3 回は牛を屠殺して供物を作るなど、簡素化されていない[加賀谷 2005: 36]。また、他のシマにおいて大きな行事が催行される際には、郷友会と相談の場がもたれ、たいてい他の島では、島から離れて居住する島出身者も帰島して参加できるよう日曜日に行事が行われるが、小浜では長老がその行事に最適な日を旧暦の干支を見て決める[加賀谷 2005: 36]。さらには、長老が公民館幹部役

¹⁴ 御嶽（「ワン」あるいは「ウタキ」と呼ばれる）とは、自然神や島の創生に携わる祖先神が祀られている聖地であり、御嶽祭祀とは、御嶽や、御嶽に付随した他の聖地で半日程度島人が集まり、そこで神に願いを捧げることを指す。島出身者は皆生得的に父親の属する御嶽に帰属するが、女性は婚出すると、嫁いだ先の家の御嶽に帰属が変更される。

¹⁵ 小浜島の年中行事の分析を行った崔仁宅は、「豊年祭、ソーラン、結願祭を除けば人々の行事参加度は全体的に下降気味である。諸行事の内容においてみ、すでに廃止になった行事や形骸化の過程にあるものなど少なからず変化の道のりをたどりつつある行事も多々存在する」と述べている[崔2002: 329]。崔が挙げたいくつかの行事は確かに戦後変容しているものの、小浜島の年中行事の簡素化の度合いは他の地域に比べると著しく小さいことが竹富島や黒島などの他の島との比較調査より明らかである。また、農業改良普及所の職員が「小浜島は行事、行事で、生活改善が不可能だ」と生活改善普及事業の推進を諦めていたことから、小浜島の人々が現在においてもいかに行事を中心に据えた生活を送っているかが示されている。

¹⁶ 「ウサイ」とは、天ぷらやソーメンチャンプルーなどの惣菜のことをいう。

員を呼び出してその日時を伝え、その役員が正装して女性司祭者「司」の家を訪れ日時を伝達するといったように、日時の伝達も今なお儀礼的に行われている[加賀谷 2005: 36]。

【年中行事が継続して行われている背景】

小浜島において現在においても数多くの年中行事が大きな変容を伴わずに継続している背景として、島固有の年中行事の存在、及び、年中行事を遂行する祭祀集団の構造に、島人を行事に向かわせるように動機付けるシステムが内在していることが指摘できる。

まず、この島固有の年中行事に、八重山の4地域のみで秘祭として行われているポールが挙げられる。この祭りの秘匿性は現在においてもなお頑なに守られており、1768年に公布された『与世山親方八重山規模帳』に「古見・小浜・高那の三か村では、豊年祭の時にアカマタ・クロマタとって二人が異様ないでたちで神のまねなどをする。良くない風俗なので今後は止めること[石垣市 1992: 65]」と、この祭りのことが記されているが、それ以降現在に至るまでの250年近くに亘って、この祭りが行われる聖地での儀式を見た部外者はいない。同時に、その秘匿性が小浜島出身者のアイデンティティの拠り所にもなっており、ポールの期間中は、島外で暮らす島出身者も大挙して島に戻り、人口は通常の2倍から3倍になる。それゆえ、ポールは島を離れて暮らす島人をもシマに結びつける結節点となっている。さらに、ポールは他の数々の年中行事と結びつき、1つの体系化した稲作儀礼の中に組み込まれているために、他の行事も取り止められることなく、現在でも小浜島では数多くの年中行事が成立していると指摘できる。

次に、祭祀集団の構造上の特徴を指摘すると、島人は行事毎に大別して3つの祭祀集団に組織される。①「ポール」を執り行う秘密結社的祭祀集団、②「ソーラ」と「シツ」を執り行い、行政区分に基づいて組織化された「南部落」「北部落」という祭祀集団、③「御嶽祭祀(ニンガイ)」を執り行う「ヤマニンジュ」と呼ばれる、6つに分かれた、父系原理による系譜集団である。また、③の「御嶽祭祀」以外の行事、すなわち練習期間を含め非常に長い時間が費やされる「三大行事」においては、実質的に男性が中心となって種々の役職を担うことから、男性は三大行事の祭祀集団を基底に組織されていると言える¹⁷。

その三大行事における男性の祭祀集団を詳細に分析すると、いずれの祭祀集団においても双分制がとられ、さらに、双分された個々の集団においては年齢階梯制がとられているという特徴が見出せる[加賀谷 2005]。このことは、男性は双分された個々の祭祀集団において、年齢階梯に伴い段階的に異なる役割が課されることを意味している。また、個々の年齢階梯においては、個人はある役割の経験者としての立場から、それぞれの階梯から下の年代の人々に対しては教育者としての役割を果たし、同時に年齢が上の人やその役割の

¹⁷ 他方、女性は三大行事で果たす役割は甚大であるにもかかわらず、「ポール」と「ソーラ」においては公的役割が課されておらず、組織化されてもいない。女性は祭祀行事において、御嶽祭祀と結願祭のみにおいて公的役職を有する。

経験を有する人からは常に教育されることとなる。つまり、男性は「ウヤンキー（長老）」になるまで生涯「教えられる立場」と「教える立場」の双方を持続する関係性を維持する。このことから、年齢階梯制に導かれる小浜島の三大大行事の男性祭祀集団は、「祭祀を担う役割を個人の生涯を通して教育し、また、その役割を教育され続けるシステムをもつ」という意味で「生涯教育システム¹⁸」としての機能を有していると言えよう[加賀谷 2005: 46]。

なお、年齢階梯制が意味するところの「生涯教育システム」とは、単なる加齢による「威信¹⁹」のみで成立しているシステムではなく、「加齢」と「役割経験」の両者が伴い初めて「権威²⁰」が成立するシステムである[加賀谷 2005: 46]。シマでは社会的に権威ある男性役職に就くためには、連続する階梯のすべての行事に参加し、行事の内容やその一連の流れ、あるいは、それを遂行するための技術を学び習得することが求められ、そのような経験の蓄積が男性に「権威」を生じさせるのである[加賀谷 2005: 46]。

さらに、この年齢階梯制は年齢集団を基盤として成立している²¹。儀礼の際、男性はいずれの空間においても年齢が高い者から上座に座し、同年齢の場合は誕生日まで考慮されて座の位置が決定される。それゆえ、島外に居住する男性が帰島して行事に参加する際にもその年齢順の配列の中で座すことが要請される。まさに男性は、行事毎に年長者の威信と権威、そして、自らが所属する社会における位置づけを否応なしに認識させられるのである。また、いずれの祭祀集団も双分制をとり、二分された組織構造があることは、相手集団に対する対抗心を芽生えさせ、他方同じ部落の男性成員同士は幼少の頃からとりわけ交流を深めていることから、各集団の男性成員はまとまりを持つという特色も指摘できる[加賀谷 2005: 52]。

以上のことから、小浜島の男性は双分制という競争原理を個人の動機付けの源とし、年齢集団及び年齢階梯に基づき序列を有した「生涯教育システム」を作り上げ、それにより個人の一生を行事に結びつけ、島出身者同士を結びつけているといえる[加賀谷 2005: 57]。

¹⁸ 「生涯教育」という用語は1965年にユネスコが提唱して以来、日本を始めとする世界各国で広く使用されている。ただし、その用語によって指し示される概念は、本稿の用法とは大きく異なっている。日本における「生涯教育」の概念は、1981年の中央教育審議会答申『生涯教育について』の第1章1項において、「国民の一人一人が充実した人生を送ることを目指して生涯にわたって行う学習を助けるために、教育制度全体がその上に打ち立てられるべき基本的な理念」として提示されている。つまり、「生涯を通じた学習」という個人の意図が重視された理念として位置づけられていることが見てとれる。しかし、本稿では本人の意志や意図とは無関係に、生涯に亘って教育する・されるという二つの行為が同時に行われることを示している。

¹⁹ 「威信」とは、他に示す威厳と、他から受ける信望や尊敬の念のことを示す。

²⁰ ここで述べる「権威」とは、自分より年齢が若い人に命令し、また命令された若者がその指示に従うような力、つまり指示と実行の関係が成立していることを指す。そして、それぞれの行事の要所を見ると、小浜島の「長老」は行事の日程を決定したり、予算を承認したりと「権威」があることが見てとれる。

²¹ 結社組織的なポールの祭祀集団への加入年齢が定まっていることから、年齢集団はこの儀礼の時に形成されるものと推察する。

さらに、そのような行事を中心とした社会のあり方が、世俗世界をも取り込んでいることが、御嶽祭祀に深く係わりを持つ公民館の役員組織の分析から明らかとなる。小浜島では行政の末端組織であり、かつ自治組織でもある公民館組織がある。37名で構成される公民館役員のうち、8名の男性で構成される公民館の幹部役員は、建前上はあくまでも世俗における行政の末端を担う役職者である。それゆえ、選挙の際には看板を立てたり、運動会や記念式典等竹富町の活動に携わり、また、シマの要望を町に申し入れるなどの役割を担っている。しかし実際には、幹部役員らの最も重要な任務は、①クバンの作成、②拝殿に捧げる御酒、米、線香の準備、③御嶽参拝を呼びかける太鼓を鳴らすこと、④御嶽の巡拝等、御嶽祭祀に係わるものである[加賀谷 2005: 54]。幹部役員に就いた男性にはこれらの御嶽祭祀にまつわる役割が課され、彼らはそれを経験する中で、年中行事の流れから願いの場における細かな動作に至る小浜の霊的世界の詳細を段階的に学んでゆく。このことは、公民館幹部役員組織それ自体が御嶽祭祀を学ぶ「教育システム」として機能しているといえよう。さらに、公民館幹部役員の5つの役職への就任年齢を見ると、年齢を経るに従い、男性は一度経験した幹部役員の役職よりも、より責任の重い役職を務めており、また、特定の男性のみがそれらの役職に就くのではなく、シマの多くの男性が段階的に種々の幹部役員の役職を経験していることが見てとれる[加賀谷 2005: 55]。それゆえ幹部役員組織もまた、御嶽祭祀、あるいは、霊的世界を学ぶための「生涯教育システム」として機能していると指摘できる[加賀谷 2005: 56]。このように、このシマでは聖と俗とを跨いだ役職が創出され、さらに、それを男性が担う中で独自の文化体系や社会システム、あるいはそこにおいて表出される独自の世界観が維持される基盤が整えられているのである。

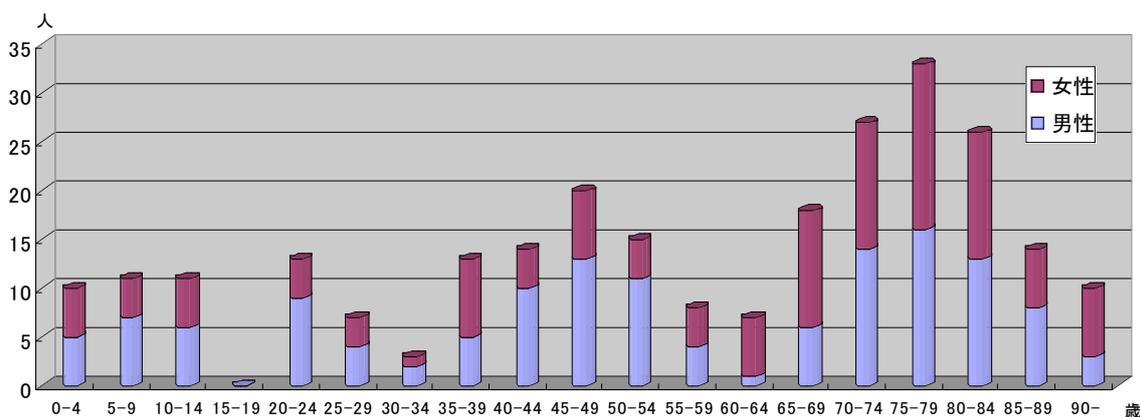
3 小浜島の生存戦略

小浜島の人々が、観光産業や移住者と一定の距離を置き、年中行事を中心とした生活を営んできた所以は、島出身者の結節点として機能する年中行事の複雑な祭祀集団の構造に見てとれる。しかし、年中行事の継続要因をそのみに求めることもできない。島人は構造的に年中行事に組み込まれている一方で、彼らの協力や選択の上にも行事は成立しているのである²²。

それは、第一に行事が旧暦のまま催行されている点に示される。大規模な行事の遂行には若者の労力が相当必要とされたため、周辺の離島では島外で居住する生産年齢層の人々が帰島可能な週末に行事が催行されることが多い。その一方、小浜島では他島同様に若者の労力の確保が厳しい状況下でありながらも（表1参照）、それは行われてこなかった。しかし、若者に代わってシマに居住する年長者が行事の準備をするわけでもない。むしろ、

²² ただし、協力や選択という行為が意識的に行われているかどうかは定かではない。

表 1：小浜島に住む島出身者の年齢別人口(2002年12月20日現在)



(小浜島郷友会名簿と聞き取り調査により加賀谷作成)

彼らは行事の練習、準備、運営といった庶務の一切を生産年齢層の男性に委ね、自身は踊りや狂言の舞台を観覧し、自宅を訪れる若者に祝福されるなど客人扱いを受ける。つまり、生産年齢層の男性の就業形態が考慮されることなく年長者の采配により年中行事が平日にも催行されてきたことは、Weber が「権威」の概念をめぐって指摘したように、周囲の人々が年長者の指示に従ってきたからに他ならない。まさに、小浜島では世俗世界の社会システムよりも祭祀行事の社会システムが重視され、かつ、それが社会の中で、とりわけ生産年齢層の男性に容認されているのである。

さらには、農業に重きが置かれている点にも彼らの選択が見出せる。観光産業は 24 時間 365 日営業であり、被雇用者の都合で勤務日程や労働時間は自由に決定できない。生産年齢層の島人の大部分が観光産業に就いてしまうと、現在のような形態で行事は維持できないであろう。しかし、サトウキビの収穫は冬季であり、この生業を維持する限りは夏季に実施される主要な年中行事との両立が可能である。それゆえ、島人は現在においても農業を継続し、製糖工場を中心に据えたサトウキビの生産体制を維持しているようにも見える。

いずれにせよ、小浜島の人々は外部社会に対して明示的に抵抗・交渉・対応することはないものの、経済状況に左右され、いつ撤退するかもわからないホテルに依存するのではなく、より持続性・安定性の高い農業を維持しつつも、ホテルからは間接的な収益を得るといった手段をとり、同時に年中行事を維持継続している。また、年中行事を通じて、シマの文化や社会システムが維持され、それによってシマへの帰属意識を強め、島内に居住する島出身者のみならず、島外に住む島出身者をもシマに結びつけている。つまり、小浜島においては、年中行事の維持継続こそが、過疎化の危機への打開策であり、外部社会に

対する将来的な抵抗戦略、または、生存戦略であると言えるのである。

Ⅲ 小浜島の女性の社会的位置づけ

1 女性の活動形態

本章では、小浜島の女性がシマの生存戦略と、また、男性とどのような係わり合いを持ち、また、女性の社会的位置づけはいかなるものであるかを論じる。その目的のため、はじめに本節では、①生業（経済）、②自治（政治）、③宗教、④家庭の4つの活動領域における女性の活動形態を明らかにする²³。

【生業（経済）形態】

生産年齢に該当する女性はほぼ全て何らかの職に就いており、その職種は民宿経営、製糖工場の事務員、病院の受付、船券の委託販売、宅急便等の輸送事業、学校給食の調理師、学校や保育所の職員、クリーニング業、ホテルでのパート、郵便局員、農業者、と多岐にわたる。このように女性たちは経済力を有して家計を支えているが、観光事業には直接に携わっておらず、観光ブームを利用して経済的利益をさらに得ようといった試みは見られない。民宿も2000年の時点ではリゾート開設直後と同数の5軒しかない上に、それらの経営者は主に島出身者と婚姻関係にある島外出身者の女性であり、島出身者で民宿を営んでいる家は2軒のみである。その一方で、島の南西部に位置する細崎部落の女性たちは、その多くが本土出身であるが、彼女らは生活改善普及事業を通じて「もずく」を養殖し、それをホテルで土産物として販売している。女性が作成した物品を島内のホテルで販売することは可能であるにもかかわらず、細崎部落の女性に見られるような経済活動を本部落の女性に見ることはできない。例えば、年に一回催される農協主催のフェスティバルにローゼルのジャムを作り販売する民宿を営む60代後半の女性がいる。この商品は毎年完売になるほどで、かなりの経済的利益があるものと思われるが、このジャムを恒常的に商品化しようといった動きは見られない。しかし、女性の観光業における活発な経済活動が見られないことは、販売のノウハウや技量を持っていないことを意味しない。

また、小浜島は「藍染織物」で著名であり[菅田1995:205]、集落内を歩けば機織の音が聞こえてくるほど機織をする女性の数も多い。しかしながら、竹富町の織物組合に所属する女性はわずかであり、また、組合員であっても織物を納入して換金する女性はいないという。さらには、2001年度に県と町の補助により、本部落の一角に6,200万円をかけて「小浜織・染工房」が建設されたが、この施設を恒常的に活用し、藍染織りを商品化しようといった動きもみられない。このような状況は、反物を織る多くの女性が年長者であり、彼女らは自分の家族・親族が行事で着るためにのみ織り、販売を目的としていないために生

²³ なお、女性の生活世界を便宜的に分節化して論じるが、このことは彼女らが自らの生活世界を意識的に区別していることを意味しない。

じている。織りに長けた女性は、サトウキビの刈り入れが終了した4月上旬からポールが行なわれる8月上旬までの間に、家族や親族のためにおよそ2~3反の反物を織る。時には同郷の友人や知人から依頼を受けて4~8反も織ることもあるという²⁴。

【自治活動】

シマの自治組織である小浜公民館における女性の役職者数は2000年度においては37名中4名（うち学校の先生1人）に過ぎず、その役職も教養部と婦人会代表者の2つに限られている。さらに、8人で構成される幹部役員にはこれまで一度も女性が就いたことがないという。シマの女性は自治活動にほとんど参加しておらず、また、公的な場で政治的発言力を持つケースはほとんどないと言っても過言ではないだろう。

また、女性は交渉事を目的として組織化しておらず、観光客を相手に婦人会で新たな事業を展開したり、島の特産物や文化を普及させようといった外部社会に対する働きかけは見受けられない。ただし、「小浜婦人会」として小浜公民館の要請に応じて敬老会や来島客（離島客）の歓迎会（送別会）等では余興を行い、そのために仕事が終わった後、夜間集まって練習に精を出し、また、料理の準備などをする。

【宗教活動】

他の八重山のシマと同様に、幾人かの女性は「司」という御嶽祭祀における司祭者として主導的な役割を担っている。しかし、その威信の低下が指摘できる。小浜島では司の継承方法が特定の系譜を重視する従来の継承方式から二カ年交代制になったために、行なうべき様々な儀礼や「願い口²⁵」、「神口²⁶」の詳細を知らない司が就任することになったことがその主な原因である。1996年前後から司の継承方法に交代制が導入され、2005年時点では6つの御嶽のうち、5つの御嶽において交代制がとられている。それゆえ、男性のみならず司に就いた経験のある女性からも「司の（するべき）ことを知らない人が司をしている」と、嘆く声が出ている。このような現状は、司を輩出すべき家と系譜関係を持つ女性が、行事の多さゆえに就任後の自らの生活に支障がもたらされることを危惧し、就任を辞退したために生じたと語られている。

【家庭生活】

女性はそれぞれ職を有しているのみならず、家庭においても料理、洗濯、掃除といった家事の一切を担っている。しかし、先述したようにシマでは数多くの年中行事が執り行わ

²⁴ ただし、若い女性は織物組合で技術を身につけられるとはいえ、日中は働いているために受講する時間を確保できず、技術は継承できていない。

²⁵ 「願い口（ネガイフチ）」神への願いを詞にした言葉で、主に御嶽などで司などの聖職者によって唱えられる。

²⁶ 「神口（カンフチ）」とは、神の詞を模した言葉。

れるため、家事を一手に担う女性の労力は計り知れない。とりわけ三人行事が次々と執り行われる夏季における女性の生活は想像を絶するものがある。以下では、三人行事の期間中の女性の生活の一端を記す。

三人行事は、7月末から8月初旬の間にポールを皮切りに始まる。行事に向けて、歌の練習がおよそ3週間前から男性のみによって毎晩のように執り行われ、練習場所には個人宅が用いられる。歌を練習する家は毎晩替わるものの、該当した家の女性はシマの男性全員分、あるいは、それ以上の飲食物を準備せねばならない。また、行事の期間中は男性が聖地に籠っているために、女性は聖地まで飲食物を運び、日に何度も着替える男性の着物の準備もする。さらに、ポールが3日間開催された翌日には、男性祭祀集団と長老が共に70歳以上の男性長老宅を一軒一軒訪れて戸主の健康を願う「ドゥハンダニンガイ（健康願い）」が行われるため、長老宅の女性は、訪れる男性の接待を行う。

ポールが終了するや否や8月中旬にはソーラが行なわれるが、女性はこの期間中、日中は自宅を訪問する親族の接待を行い、夜間はいずれかの夜に家を訪れる祭祀集団の接待をする。さらに、3日間行事を終えた翌日に再度ドゥハンダニンガイが行われるため、長老宅の女性は、行事期間中に2度も大きな接待を行うことになる。さらには、1人では客人を接待しきれない年長女性が多いため、生産年齢層の女性は複数の親族を手伝い、行事期間中は休む間もなく働くことになる。

9月から10月の間に行なわれるシツにおいては、およそ60歳以下の女性は踊り子としての役職を有する。そのため、行事の一週間前から毎晩9時頃集まり、深夜12時過ぎまで練習をする。特に子どもを持つ女性は、子どもの世話をしながら自らも稽古に励まねばならない。

島に居住する移住者や他島の女性のみならず、シマの女性自身までもが「小浜は男中心だ」「小浜は男尊女卑的などころがある」と表現するのは、まさにこれまでに述べた数々の状況を表現したに他ならない。さらには、他島出身者は小浜の女性が「女は酒、タバコはのまないものである」という規範を遵守していることも、男性中心的な社会であることの根拠に挙げられる。その一方で、島の女性たちに現状を変えようとする大きな動きも見られない。他の八重山諸島から嫁いだ女性が「比較的若い時には（女性の労働が過酷な）行事を改善したいと話していた女性たちも、年をとると意見が変わる」と語った言葉に示されるように、むしろ先に示したようなジェンダーのあり方が再生産されているかのようである。

2 社会への女性の多様な参与形態

本節では、1節に示した女性の活動形態をシマの生存戦略と照らし合わせ、女性の活動形態が女性の地位の低さと結びつくのか否かを検討する。その目的のため、前節で述べた女性の活動形態のうち、シマの生存戦略に最も関係深いと思われる女性の宗教活動、すな

わち、年中行事への係わりに焦点をあて、その詳細を明らかにする。

既に述べたように、年中行事のうち男性が中心となって執り行う三大行事と、女性が中心となって執り行う御嶽祭祀の双方に女性は参与しているが、その係わり方は異なる。それゆえ、最初に三大行事に対する女性の係わりからその社会的位置づけを検討し、その後、先行研究において沖縄の女性の宗教的地位の高さが指摘されてきた御嶽祭祀に対する女性の係わりに着目する。小浜島では年中行事の要となる司への就任を辞退する女性が増加しているが、そのことの意味の考察を通じてシマの女性の社会的位置づけを論じる。

【女性の三大行事への係わり】

前節の「家庭生活」の項で明らかにしたように、シツを除いた三大行事では女性は役職を有していない。それゆえ、彼女らはポールやソーラの際、着物に着替えずに各家の外で立ったまま祭祀の様子を見ているか、あるいは、台所で男性祭祀集団を接待するための準備に奔走していることが多い。これは、行事が始まる1週間以上前から着物をつけて練習や予算編成等の議論を始め、行事当日もその運営を一手に担い儀礼的行為を遂行している男性の姿とは対照的である。

しかしながら、こうした実践は女性が男性に従属していることを意味するものでも、また、女性が社会から排除されていることを示すものでもない。年長女性は自ら織った反物での着物の作成、供物の作成、祭祀集団の接待等に関与し、生産年齢層の女性もまた次世代の島人の再生産に大きく寄与している。以下ではそれらの女性の実践がいかに社会に大きな役割を果たしているかを記す。

年長女性は島に居住する家族のためのみならず、島外で暮らす親族が身に着ける着物まで作成している。シマではいずれの年中行事においても着物を着なくては参加できないという規範があり、特に男性が身につける「クンズン」と呼ばれる濃い藍色の着物は、成人男性の象徴とされ、シマでの生活には欠かせないものとなっている。それゆえ、女性の織りという行為は、島外に居住している成人男性を島に居住している人と同じ資格で行事に参加させるという点で、シマの維持存続に寄与している。

女性の供物の作成もまた特別な意味を持つ。三大行事のうち女性のこの役割が最も顕在化する儀礼に、ポールの3日目の夕刻に行われる「シネノハーマ」がある。この儀礼では、37歳の男性2名が稲穂の神に扮し、集落内の定められた4軒の家を廻り、頭上に稲と粟の穂をのせて舞い、頭の上の稲や粟のように来年も豊作であるようにと予祝の詞を述べる[早稲田大学アジア学会 1968: 8-9]。女性は早朝からその4軒の家のいずれかに集まり、各家でドラム缶何本分あるもやしのひげをとって「シネー」と呼ばれるもやしの胡麻和えを作り、神の行脚にともする男性と集まった子どもたちに儀礼の際それを配布する。そのため、女性の供物の作成は、牛を屠殺して神に捧げる供物「クバン」を作成する男性役割とは形態を異にし、「分配」という側面も重視されていることがわかる。それはまた、御嶽祭祀

の供物「ブン」の作成に際し、ヤマニンジュの女性かもやしや長命草といった食材を特定の家を持ち寄り、それらを合わせて調理し、さらに御嶽で儀礼を行った後に男性ヤマニンジュに分配するという行為にも見てとれる。女性による供物の作成という行為は、同じ祭祀集団の成員の融合の象徴の施与が見られ、これはまた沖縄の固有信仰として見出されてきた「ヲナリ神信仰²⁷」とも一致しているように見てとれる。

また、女性にとって男性祭祀集団の接待が最も労力を伴うことは否めないが、それは決して男性への従属を意味しない。一例を挙げると、ある女性がかつてドゥハンダニンガイにおける男性の接待の際、慣習的に定められていた料理の内容や飲み物の分量を変えたところ、長老から非難の声が挙がったという。しかし、結果的にそれが他の家庭にも波及し、シマに広く受容されることとなったそうである。家庭での料理という行為が完全に私的行為としてみなされているならば、料理の形態に批判の声が挙がることはない。つまり、長老からの非難の声に示されるように、祭祀集団が儀礼的に家庭領域を年に何度も訪れる小浜島では、家庭領域も公的領域化されているのである。それゆえ、男性祭祀集団の接待をはじめとする女性が行事期間中に家庭領域で行う数々の行為は、役職名こそないものの公的な行為として位置づけられるのである。

さらには、仕事を有しているために御嶽祭祀に参加することが少ない生産年齢層の女性たちもまた、三大多行事には積極的に参与している。先に述べたように、三大多行事があることによる女性の労力は計り知れないが、生産年齢層の女性もそれらの役割を拒否することなく家族の着物の準備をし、そして、家庭領域において儀礼的行為が行われる際には料理を提供している。とりわけ、ソーラやシツにおいては、自らの仕事を終えた5時以降に子どもに食事を提供し、子どもを夜間の行事の練習へ送り出している。シツにおいては、女性自身が行事の1週間前から毎晩9時頃から12時過ぎまで踊りの稽古をし、そして翌朝仕事に出るという生活を送り、行事が執り行われる3日間も、自ら踊り子として踊りながら他の踊り子や子どもの化粧、衣装の着替えを手伝う。つまり、女性は自ら行事に参加するのみならず、家庭での役割を担いそれを遂行することを通じて、各家庭の子どもや男性を「生涯教育システム」に組み入れることを可能にしているのである。女性がその労力を厭わずに女性役割に従事することは、女性役割を規範に基づき踏襲していると見てとるよりも、規範を守ることを積極的に選び取り、それによってシマの維持存続に参加していると見てとることができよう。

【女性の御嶽祭祀への係わり】

他方、女性は、御嶽祭祀を遂行する祭祀集団のヤマニンジュにおいては、神と島人とを取り次ぐ役割を担い、また、神女組織として階層的に組織化されている。小浜島には「A

²⁷ 姉妹が兄弟を霊的に守護するという信仰。

御嶽」 「B 御嶽」 「C 御嶽」 「D 御嶽」 「E 御嶽」 「F 御嶽」 の6つの御嶽と、それら御嶽に帰属するヤマニンジュがそれぞれ6つある。各ヤマニンジュには、最高司祭者である「司（ツカー）²⁸」を筆頭に、その司の補佐役を務める「脇司（バギツカサ）」、また、「ブンを拝む（持つ）人」と呼ばれる女性が2名いる。さらに、五山²⁹の司の全ての補佐役を務める「カンサンツ」と呼ばれる役職者がいる。

「司」は年に15前後ある御嶽祭祀の祭祀を司り、年2回ユンゴモリ（夜籠り）³⁰を行う。戦前の司は新築祝いなどにも招かれ、謝礼を受け取ることで各家庭においても祈りを捧げていたが、戦後の生活難の時代に、儀礼に係わる費用を削減しようとの理由から、司の任務は御嶽祭祀のみに限定された。「脇司」は司の指示によって祭壇で酒をついだり、線香に火をつけたりといったさまざまな補助行為を行う。「ブン」とは、ポールと旧暦10月に行われる「タナドゥル（種子取祭）」の時に作成される供物であり³¹、「ブンを拝む（持つ）人」は、ポールとタナドゥルの際、御嶽においてミシャグ（酒）を注ぎながら歌を歌い、杯を受ける者の幸を願う。「カンサンツ」は、五山の司が一同に会す年に2回のユンゴモリの際に、司と共に神殿で夜を明かし司の手伝いをする、あるいは4年に1度女性全員が「ユンドレスク³²」という聖地に行くときの先導役となる。

これら司祭者が一般のヤマニンジュよりも威信が高いことは確かであるが、司の威信の高さに関しては、他の司祭者とは比べものにならないことが次に挙げる5つの項目に示される。第一に、司の役職に対しては公民館とヤマニンジュから報酬が支払われていること。第二に、司の衣装は他の女性とは異なり、人頭税時代から最も高価な上布として薩摩藩に献納されていた芭蕉布で作られた薄黄色の着物であること。第三に、司に就任する時のみ「神開き」という儀礼が行なわれ、また、一度司になるとその継続性に重点が置かれていること。第四に、男性側の司に対する態度が他の女性に対する態度とは異なること。例

²⁸ 司には禁忌は課せられておらず、非婚の規定もない。むしろ、結婚して子供を産むことが、繁栄の象徴として重要視されると司自身は解釈している。

²⁹ 6つの御嶽は、「F御嶽」と他の5つの御嶽とにわけられ、後者は「五山（ウーヤマ）」と言われる。

³⁰ ユンゴモリ（夜籠り）とは、ニンガイ（願い）の前日の夜から御嶽に宿泊して、一晩中線香を絶やさないようにすること。

³¹ ブンとは、お膳の上に8つの小さなお椀の中心に大きなお椀が備えられ（計9つの椀）、周囲のお椀にはシネーが盛られ、中心のお椀にはシネーが盛られた後、縦長のかまぼこで周囲に壁を作り、その中に豆腐をいれ、さらに豆腐の上にゆで卵をのせて藁で縛った供物である。なお、藁は右が5本、左が4本の計9本を縛ってできた紐状のものである。シネーとは、「青菜の和え物」として表現される。ブンを持つ家にヤマニンジュの女性が海藻（ツノマタ・ガーナ）や青菜、もやしなどのシネーの材料を持って集まり、ヤマニンジュの女性が持ってきた材料を一つにして混ぜ合わせ、みそ、ゴマ、ピーナツバター、砂糖等で味を調べて作る。このように、各家庭の食材を女性が持ってきてそれを1つにする行為は、戸々の家々の融合を象徴的に示す行為であると解釈できる。

³² 「ユンドレスク」は、西表島の古見の方角にある聖地で、小浜島の住民の祖先がやってきたとされる神聖な場所である。

えば、行事の日程を司に伝える際、男性である部落会長が司の自宅に直接出向いて伝えるが、その時部落会長は正装して司に会いに行かなければならない。加えて、女性は結婚すると夫の御嶽に帰属が変更されるが、司だけは婚出した後も生家の御嶽の司として君臨する。第五に、司は一般の人と同様に夫方の墓に埋葬されるが、一般の女性とは異なり遺体には黒い着物に「カカン³³」をつけられ、布団のかわりに芭蕉の着物で包まれ、赤い布にビーズ玉の刺繍を施したはちまきも死者である司の頭に巻かれる。このように、死者が一般の人と異なり、生前の役職に関係した正装が施され、埋葬されるといった行為に、司の威信の高さが表れている。さらに、司は御嶽において司祭者としてヤマニンジュ全員に神を拝するよう指示を出し、ヤマニンジュもその指示を受容して一斉に拝することから、司は威信のみならず権威も有した存在である。

しかしながら、女性であるからといって誰もが司に就任できるわけでも、努力や訓練によって就けるものでもない。司はそれを輩出する血筋が明確に定められており、御嶽の発祥に関連している家の系譜にある女性かどうか、すなわち「筋<ピキ>」が通っているかどうかで選ばれる。例えば、A 御嶽では M 家の「筋」を引く女性が、母から娘へと司を継承していくことが最も望ましいとされている。2005 年に就任している司から遡ること 7 代前までの系譜関係を詳らかにすると、実際には適任者がいない場合や適任者が辞退した場合には、嫁継ぎとなったり、K 家の嫁、脇司、カンサンツが担っていたりする場合も見受けられるが、理念としては「筋を引くものが司となることが最も好ましい」と島人に考えられており、適任者がいるならば M 家に役職が返上され、現在は M 家の娘が司に就いている。

以上のことから、御嶽の祭祀組織に女性の社会組織と呼びうるものを見出すことができ、その組織の頂点に司が位していることが明らかとなった。また、司以外の司祭者の役職は全て期限付きの交代制となっているために、威信の高い女性の役職は司に限定されている。さらに、その役職に就けるか否かは生得的に決定されているため、女性は生得的な序列を有するとも指摘できる。言い換えるならば、女性は後天的に獲得される序列を有さず、むしろ平等な社会関係の中でシマの行事に係わってきたといえよう。このような社会組織のあり方は、一定の年齢に達するとほぼ全員に役割が付与され、加齢と共に役割経験の蓄積に基づき後天的に権威が与えられていき序列が形成される男性の社会組織の仕組みとは大きく異なっている。

しかし、司の役割が生得的に付与されることは、その役割を担うことの重要性が他者（特に男性）から見えにくくなることを意味している。行事が多い小浜島に住む女性にとって、宗教的役職を担うことがどれだけ大変であるかは計り知れない。その役職の困難さを男性が認識せずに、また、終戦直後とは異なり司に経済的利益が十分にもたらされない状況下

³³ カカンとは、白い袴のような衣服で「小浜節」を歌う時に女性が身に着ける正式な礼服である。

で、生得的という理由だけで宗教的役割を付与されることは、該当する女性にとって不条理この上ないことであることが想像に難くない。

近年、そのような女性の問題意識を示すかのような現象が生じている。それは、司を輩出する家の系譜の女性が司の継承を拒否し、司が2ヵ年交代の交代制になったことである。2002年時点で、小浜島で正統とされる系譜関係に基づき司を継承している女性はA御嶽とF御嶽の司2人だけであり、他の御嶽の司は皆交代制になっている。これは、1996年前後にC御嶽の司が亡くなり、亡くなった司の実の娘が司の就任を拒否したため³⁴、その夫である男性が宮古島の佐良浜で実施されていた司の交代制という継承方法をヤマニンジュに提起し、同年、年長女性から2ヵ年交代制でその方法が実施されるようになったことに端を発している。同様にB御嶽やE御嶽でも、正当な血筋を引く者や最も近い親族が、娘がいない、夫が反対した等の理由で司の継承を拒否した。そのため、男性ヤマニンジュらがC御嶽と同じ制度をとることを提案し、それが女性ヤマニンジュらに受容され、2002年においては6つの御嶽のうち3つの御嶽において司は交代制になっていた。

どのような理由が提示されるにせよ、既存の制度を女性が踏襲していないことは、まさに女性がただ規範通りに御嶽祭祀に参加し、ただ従順に司祭者に就いているわけではないことを示している。たとえば、「D御嶽」で2004年まで25年間司を務めていたXも、25年前に司の就任を決める際に、ヤマニンジュの男性との間で交渉を経た後にその役職に就いている。D御嶽では、正統な系譜を持つ女性の中に成り手がいなかったため、1970年代から脇司であったXが次期司に立つようヤマニンジュの男性から要請されていた。当時ホテルに勤務していたXは、「子どもを女手一つで育てなくてはならず、司を務めると行事の際に仕事を休まなくてはならないため、その役職を引き受けることができない」と、ヤマニンジュの男性の再三に及んだ依頼を断っていた。しかし、ヤマニンジュが給料に代わる謝礼を支払うという条件を提示してきたために、Xは1980年前後に司を引き受けた。その後25年以上もの長きに亘って正統な系譜関係に基づかなくとも彼女が司を務めてきたのは、他者がその役割の重要性を認めていたからに他ならない。とりわけ、男性が司の不在を一番恐れていることは、妻の就任を断りながらも新たな継承方法を提起し、司という役職をどうにか維持継続させようと画策した夫の姿に明らかである。この点において、まさに女性はその役割の重要性を男性に客体化させることに成功しているといえる。そして、「正統な系譜関係に基づく司」が現在ほとんど見られず、多くの女性が交代制を「よ

³⁴ 就任を断った理由については、本人ではなくシマの女性の語りであることをここで断っておく。それゆえ、実際に本人が家庭を理由にヤマニンジュに申し立てをしたのかは不明であり、また、「夫が」と語られているものの、実際に妻が夫の口を通じて自分の意志を述べた可能性もある。ここでは、女性が辞退した理由を問うのではなく、そのことに男性がどう対処したのかという過程と結果が重要である。

いこと」と評価していることは³⁵、女性が行事の形を少しずつ変えながらもその維持継続に協力している社会への参与の一形態を示しているといえよう。

IV 結論

小浜島の女性はいずれの年齢であっても、慣習的に女性に付与された役割に従事することを通じて、シマの生存戦略としての年中行事の維持継続に協力している様子がみてとれた。経済力や政治力で測定する国際的な男女平等モデルに基づけば、小浜島の女性は自律の能力に欠けており地位が低いと捉えられるかもしれない。しかし、その活動を小浜島という固有の社会的脈絡に位置づけると、シマの存続に貢献していると読み替えられるのである。例えば、多くの女性が、経済的利潤が見込まれる観光産業にまつわる経済活動には従事せず、外部社会との接点を最小限に留めていることも、男性の活動形態と一致した実践であり、秘祭であるポールの秘儀性を守ることに寄与する。また、女性が自治組織に参加しないことも、男性が御嶽祭祀の詳細を学ぶ場として機能している公民館幹部役員組織という場を維持する試みのようにも見てとれる。小浜島がマクロな資本主義経済構造に取り込まれ、それに対して対応策をとる中で、女性もまたシマの執る戦略に即してシマを維持存続できるよう戦略的に動いているのである。

また、シマに生まれた女性たちが自らの役割を覚悟の上でシマに居住していることは、「最近の小浜の若い女の人は、シマの人と結婚しながらない」という女性の言葉にも示されていると思われる。シマに育った女性は自らに将来的に課される役割を熟知し、それに賛同できない場合は婚出しているのである。例えば、シマで生活を送る、数少ない小学生の子供を持つ島出身の女性の多くは、本土での生活を経験した上で、島人と結婚し帰島している。つまり、島出身の女性にとって、シマに住むことそのものが既に積極的な選択なのである。

それゆえ、激変する社会においてシマの独自性を固守するため変化を最小限に留めようと規範を遵守すること、またそのためにその時々新たな工夫を施すことも、主体のあり様を示しているといえる。Ahearn が指摘するように、抑圧に抗するような行為がみられることのみが主体性を示すわけではなく、また、意識的に何らかの動機に基づいて行為することだけが主体性を示すわけでもない[Ahearn 2001: 115-116]。

中谷文美は次のように述べている。「『女性の地位』『男性の優位性』といった概念を普遍的に適用することは分析上なんら意味を持たないことになる。もしも女性の経験や活

³⁵ 司が交代制になり、「願い口」を覚えておらず、また、祭壇の前で執り行うべき行為を理解していない司が増加したにも係わらず、交代制をとっているヤマニンジュの女性達は、その制度をよいものとして捉えており、評判は上々である。交代制の司本人は、自ら「本当の司ではない」と表現し、あくまでも「代理」という形で遂行していると主張するが、役職を遂行することそれ自体を否定的に捉えているわけではない。むしろ、「本人の気持ちさえあれば神に願いは届くので、皆が神事を経験できてよい」といったことを多くの女性が述べている。

動内容、ニーズといったものを分析しようとするなら、それは社会的・歴史的に特定されたコンテキストの中で行うべきである」[中谷 1997: 237]。本稿は、まさに中谷の提起した分析視点を、具体的事例を通じて論証したともいえよう。女性の地位や社会的位置づけとは、経済力や政治力の有無、あるいは、宗教における主導性といった特定の行為や活動によって捉えることはできず、女性の属する生活世界の文脈に沿ってその行為を解釈し、その上でジェンダー関係を論じなくてはならない。そして、そのことによって初めて多様な主体としての女性が浮かび上がってくるのである。

謝辞

本論文は小浜島の方々が筆者を温かく迎え入れ、様々な行事に参加させてくださり、また快くお話をくださったゆえに完成に至りました。小浜島の皆様に改めて御礼申し上げます。また、大変お世話になった何名かのオジー、オバーのご逝去の報に接し、ご生前のご厚情に感謝申し上げますとともに、心からご冥福をお祈りいたします。本論文で記した内容は、主に 2002 年度のデータに基づいていますが、小浜島は 2001 年に NHK の朝の連続ドラマ「ちゅらさん」の舞台になった影響で、その後観光開発が進行し、2007 年 3 月現在、シマの生業形態や景観にも変化が見られます。今後、シマの方々と年中行事との係わりあいにも変化が生じるかもしれません。しかし、その一方でシマを想う気持ちの強い青年も多く帰島しています。その方々の今後のご活躍に期待すると共に、皆様のご多幸を心より祈念しております。

なお、本研究は博士論文の第 3 章を改訂したのもでもあり、博士論文の執筆においては指導教官の波平恵美子先生をはじめ、伊藤るり先生、石塚道子先生、館かおる先生、倉石あつ子先生に多くのご教示を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。

最後になりますが、本論文の執筆の機会を与えてくださった岡崎先生、査読者の先生、及びピアレビューしてくださった一橋大学院院生の深田さん、古川さんにも貴重なご意見を頂いたことに感謝申し上げます。

参考文献

石垣市総務部市史編集室（編）

1992 『与世山親方八重山島規模帳』石垣市役所。

加賀谷 真梨

2005 「沖縄県・竹富町小浜島における生涯教育システムとしての年中行事」、『日本民俗学』242: 35-63。

窪田 幸子

2004 「文化人類学とジェンダー研究」、『性と文化』、山本真鳥（編）、pp.129-158、法政大学出版局。

国連開発計画(編)

1996 『ジェンダーと人間開発』 国際協力出版会。

菅田 正昭 (編著)

1995 『日本の島事典』 三交社。

竹富町史編集委員会

1993 『ぱいぬしまじま：写真に見る竹富町のあゆみ』 竹富町役場。

崔 仁宅

2002 「変わり行く祭祀儀礼—沖縄と韓国—」、『琉球・アジアの民俗と歴史：国立歴史民俗博物館比嘉政夫教授退官記念論集』、記念論集刊行会（編）、pp.313-340、榕樹書林。

中谷 文美

1997 「『女性』から『ジェンダー』へ、そして『ポジショナリティ』へ」、『岩波講座文化人類学 第4巻 個からする社会展望』、青木保 他（編）、pp.225-253、岩波書店。

群星会

1999 『20年の想い』 はいむるぶし。

早稲田大学アジア学会

1968 『実地調査報告書—沖縄八重山小浜島—』 早稲田大学アジア学会。

Abu-Lughod, Laila.

1986 *Veiled Sentiments: Honor and Poetry in a Bedouin Society*. Berkeley: University of California Press.

Ahearn, Laura M.

2001 Language and Agency. *Annual Review of Anthropology*. 30: 109-137.

(2007年3月13日採択決定)